# 變な音

夏目漱石

青空文庫

# 上

うと〳〵したと思ふうちに眼が覺めた。すると、隣の室で妙な音がする。始めは何の音とも又何處から來るとも判然した見當が付かなかつたが、聞いてゐるうちに、段々耳の中へ纏まつた觀念が出來てきた。何でも山葵卸しで大根かなにかをごそごそ擦つてゐるに違ない。自分は確に左樣だと思つた。夫にしても今頃何の必要があつて、隣りの室で大根卸を拵えてゐるのだか想像が付かない。

いひ忘れたが此處は病院である。賄は遙か半町も離れた二階下の臺所に行かなければ一人もゐない。病室では炊事割烹は無論菓子さへ禁じられてゐる。況して時ならぬ今時分何しに大根卸を拵えやう。是は屹度別の音が大根卸の樣に自分に聞えるのに極つてゐると、すぐ心の裡で覺つたやうなものゝ、偖それなら果して何處から何うして出るのだらうと考へると矢ツ張分らない。

自分は分らないなりにして、もう少し意味のある事に自分の頭を使はうと試みた。けれども一度耳に付いた此不可思議な音は、それが續いて自分の鼓膜に訴へる限り、妙に神經に祟つて、何うしても忘れる譯に行かなかつた。あたりは森として靜かである。此棟に不自由な身を託した患者は申し合せた樣に默つてゐる。寐てゐるのか、考へてゐるのか話をするものは一人もな

い。廊下を歩く看護婦の上草履の音さへ聞えない。その中に此ごし〳〵と物を擦り減らす様な異な響丈が氣になつた。

　自分の室はもと特等として二間つゞきに作られたのを病院の都合で一つ宛に分けたものだから、火鉢などの置いてある副室の方は、普通の壁が隣の境になつてゐるが、寢床の敷いてある六疊の方になると、東側に六尺の袋戸棚があつて、其傍が芭蕉布の襖ですぐ隣へ徃來が出來るやうになつてゐる。此一枚の仕切をがらりと開けさへすれば、隣室で何を爲てゐるかは容易く分るけれども、他人に對して夫程の無禮を敢てする程大事な音でないのは無論である。折から暑さに向ふ時節であつたから縁側は常に明け放した儘であつた。縁側は固より棟一杯細長く續いてゐる。けれども患者が縁端へ出て互を見透す不都合を避けるため、わざと二部屋毎に開き戸を設けて御互の關とした。夫は板の上へ細い棧を十文字に渡した洒落たもので、小使が毎朝拭掃除をするときには、下から鍵を持つて來て、一々此戸を開けて行くのが例になつてゐた。自分は立つて敷居の上に立つた。かの音は此妻戸の後から出る様である。戸の下は二寸程空いてゐたが其處には何も見えなかつた。

　此音は其後もよく繰返された。ある時は五六分續いて自分の聽神經を刺激する事もあつたし、又ある時は其半にも至らないでぱたりと已んで仕舞ふ折もあつた。けれども其何であるかは、つひに知る機會なく過ぎた。病人は靜かな男であつたが、折々夜半に看護婦を小さい聲で起してゐた。看護婦が又殊勝な女で小さい聲で一度か二度呼ばれると快よい優しい「はい」と云

ふ受け答へをして、すぐ起きた。さうして患者の爲に何かしてゐる様子であつた。

ある日回診の番が隣へ廻つてきたとき、何時もよりは大分手間が掛ると思つてゐると、やがて低い話し聲が聞え出した。それが二三人で持ち合つて中々捗取らないやうな濕り氣を帶びてゐた。やがて醫者の聲で、どうせ、さう急には御癒りにはなりますまいからと云つた言葉丈が判然聞えた。夫から二三日して、かの患者の室にこそ〳〵出入りする人の氣色がしたが、孰れも己れの活動する立居を病人に遠慮する様に、ひそやかに振舞つてゐたと思つたら、病人自身も影の如く何時の間にか何處かへ行つて仕舞つた。さうして其後へはすぐ翌る日から新しい患者が入つて、入口の柱に白く名前を書いた黒塗の札が懸易へられた。例のごし〳〵云ふ妙な音はとう〳〵見極はめる事が出來ないうちに病人は退院して仕舞つたのである。其うち自分も退院した。さうして、彼の音に對する好奇の念は夫ぎり消えて仕舞つた。

## 下

三ヶ月許して自分は又同じ病院に入つた。室は前のと番號が一つ違ふ丈で、つまり其西隣であつた。壁一重隔てた昔の住居には誰が居るのだらうと思つて注意して見ると、終日かたりと云ふ音もしない。空いてゐたのである。もう一つ先が即ち例の異樣の音の出た所であるが、此處には今誰がゐるのだか分らなかつた。自分は其後受けた身體の變化のあまり劇しいのと、其

劇しさが頭に映つて、此間からの過去の影に與へられた動搖が、絶えず現在に向つて波紋を傳へるのとで、山葵卸の事などは頓と思ひ出す暇もなかつた。夫よりは寧ろ自分に近い運命を持つた在院の患者の經過の方が氣に掛つた。看護婦に一等の病人は何人ゐるのかと聞くと、三人丈だと答へた。重いのかと聞くと重さうですと云ふ。夫から一日二日して自分は其三人の病症を看護婦から確めた。一人は食道癌であつた。一人は胃癌であつた、殘る一人は胃潰瘍であつた。みんな長くは持たない人許ださうですと看護婦は彼等の運命を一纏めに豫言した。

　自分は緣側に置いたベゴニアの小さな花を見暮らした。實は菊を買ふ筈の所を、植木屋が十六貫だと云ふので、五貫に負けろと値切つても相談にならなかつたので、歸りに、ぢや六貫やるから負けろと云つても矢つ張り負けなかつた、今年は水で菊が高いのだと説明した、ベゴニアを持つて來た人の話を思ひ出して、賑やかな通りの緣日の夜景を頭の中に描きなどして見た。

　やがて食道癌の男が退院した。胃癌の人は死ぬのは諦めさへすれば何でもないと云つて美しく死んだ。潰瘍の人は段々惡くなつた。夜半に眼を覺すと、時々東のはづれで、附添のものが氷を摧く音がした。其の音が已むと同時に病人は死んだ。自分は日記に書き込んだ。——

「三人のうち二人死んで自分丈け殘つたから、死んだ人に對して殘つてゐるのが氣の毒の樣な氣がする。あの病人は嘔氣があつて、向ふの端から此方の果迄響くやうな聲を出して始終げえ〳〵吐いてゐたが、此二三日夫がぴたりと聞こえなくなつたので、大分落ち付いてまあ結構だと思つたら、實は疲勞の極聲を出す元氣を失つたのだと知れた。」

其後患者は入れ代り立ち代り出たり入つたりした。自分の病氣は日を積むに從つて次第に快方に向つた。仕舞には上草履を穿いて廣い廊下をあちこち散歩し始めた。其時不圖した事から、偶然ある附添の看護婦と口を利く樣になつた。暖かい日の午過食後の運動がてら水仙の水を易へてやらうと思つて洗面所へ出て、水道の栓を捩つてゐると、其看護婦が受持の室の茶器を洗ひに來て、例の通り挨拶をしながら、しばらく自分の手にした朱泥の鉢と、其中に盛り上げられた樣に膨れて見える珠根を眺めてゐたが、やがて其眼を自分の横顏に移して、此前御入院の時よりもうずつと御顏色が好くなりましたねと、三ヶ月前の自分と今の自分を比較した樣な批評をした。

「此前つて、あの時分君も矢張り附添で此處に來てゐたのかい」

「えゝつい御隣でした。しばらく○○さんの所に居りましたが御存じはなかつたかも知れません」

○○さんと云ふと例の變な音をさせた方の東隣である。自分は看護婦を見て、これがあの時夜半に呼ばれると、「はい」といふ優しい返事をして起き上つた女かと思ふと、少し驚かずにはゐられなかつた。けれども、其頃自分の神經をあの位刺激した音の原因に就ては別に聞く氣も起らなかつた。で、あゝ左樣かと云つたなり朱泥の鉢を拭いてゐた。すると女が突然少し改まつた調子で斯んな事を云つた。

「あの頃貴方の御室で時々變な音が致しましたが……」

自分は不意に逆襲を受けた人の様に、看護婦を見た。看護婦は續けて云つた。

「毎朝六時頃になると屹度する様に思ひましたが」

「うん、彼れか」と自分は思ひ出した様につい大きな聲を出した。「あれはね、自働革砥の音だ。毎朝髭を剃るんでね、安全髪剃を革砥へ掛けて磨ぐのだよ。今でも遣つてる。嘘だと思ふなら來て御覽」

看護婦はたゞへえゝと云つた。段々聞いてみると、〇〇さんと云ふ患者は、ひどく其革砥の音を氣にして、あれは何の音だ何の音だと看護婦に質問したのださうである。看護婦が何うも分らないと答へると、隣の人は大分快いので朝起きるすぐと、運動をする、其器械の音なんぢやないか羨ましいなと何遍も繰り返したと云ふ話である。

「夫や好いが御前の方の音は何だい」

「御前の方の音つて？」

「そら能く大根を卸す様な妙な音がしたぢやないか」

「えゝ彼れですか。あれは胡瓜を擦つたんです。患者さんが足が熱つて仕方がない、胡瓜の汁で冷してくれと仰しやるもんですから私が始終擦つて上げました」

「ぢや矢張大根卸の音なんだね」

「えゝ」

「さうか夫で漸く分つた。——一體〇〇さんの病氣は何だい」

「直腸癌です」

「ぢや到底六づかしいんだね」

「えゝもう疾うに。此處を退院なさると直でした、御亡くなりになつたのは」

自分は默然としてわが室に歸つた。さうして胡瓜の音で他を焦らして死んだ男と、革砥の音を羨ましがらせて快くなつた人との相違を心の中で思ひ比べた。

明治四四、七、一九―二〇

# 青空文庫情報

底本：「漱石全集　第十七巻」岩波書店
　1957（昭和32）年1月12日第1版発行
　1960（昭和35）年9月10日第2版
入力：山田豊
校正：Juki
1999年12月18日公開
2011年6月3日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 變な音

夏目漱石

2026年10月1日　第二版


## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙



青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/